乳幼児のボタン電池誤飲に注意！

消費者庁と国民生活センターが平成26年6月に公表した「乳幼児のボタン電池の誤飲に関する事故情報」で、公表されたのはどのような事例ですか。

＜事例1＞

1歳児が、タイマーの蓋（ふた）を取って遊んでいるのを母親が発見。あるはずのボタン電池が見当たらないので受診。誤飲しており、マグネットカテーテルで摘出。電池は黒色に変色。

＜事例2＞

おもちゃが壊れ、0歳児が中のボタン電池を誤飲し、マグネットカテーテルで摘出。

＜事例3＞

2歳児が、電池保管ケースの蓋を開けて、コイン形リチウム電池を誤飲し、摘出手術。食道の組織破壊が進んでおり、穴が開きかねない状態のためICU（集中治療室）収容。1ヶ月間入院。

＜事例4＞

LEDライト付き耳かきのコイン形リチウム電池を、1歳児が誤飲。9時間かけて摘出したが、放電の影響で、気道と食道に穴が開き、2ヶ月入院。

電池を誤って飲み込んでしまった場合、消化管に接触した電池から電流が流れると、電気分解により電池の外側にアルカリ性の液体が作られ、短時間で消化管の壁に損傷が起こります。そのため早く取り出さないと、消化管に腫瘍ができたり、穴が開くなどの恐れがあります。

電池の中でもリチウム電池は、放電電圧が高く、電池を使い切るまで一定の電圧を保持する特性があります。

特にコイン形の電池は平たく幅が広いので、1歳前後の子どもが誤飲すると、食道にとどまることが多いため、極めて危険

です。

また、胃に入ってしまった場合は、胃液で電池の金属皮膜の腐食が起こります。それにより、電池内部の電解液自体にアルカリ性液を使っているアルカリマンガン電池などでは、アルカリ性の液体が流出し、消化管の壁を損傷する恐れも指摘されています。

ボタン電池は、玩具だけではなく、時計、タイマー、LEDライトなど、子どもが簡単に手にできる、さまざまな製品に使用されています。乳幼児のいる家庭では、ボタン電池の危険性を認識し、その保管や廃棄方法に十分気を付けてください。

そして、万一子どもがボタン電池を飲み込んでしまった場合や、その場の状況から判断して、その可能性があると思われる場合は、一刻も早く医療機関に行くようにしてください。

また、ボタン電池の誤飲以外にも、色々な電池による事故は発生しています。その中には、使用者の誤使用や不注意が原因の事故が少なくありません。

電池は、取り扱いを間違うとショートしやすくなり、破裂や発火の原因となったり、液漏れを起こしたりします。

電池を取り扱う時は、次のような点に注意してください。

①落としたり、押し潰（つぶ）したりして変形させない。

②プラス極とマイナス極を確認し、使用する機器の表示に従い、正しい方向に装填（てん）する。

③種類やメーカーの違う電池を混ぜたり、新しい電池と使いかけの電池を混ぜて使用しない。

④保管する時は、プラス極とマイナス極が接触しないようにし、ヘアピンやコイン、鍵等の金属類と一緒に保管しない。

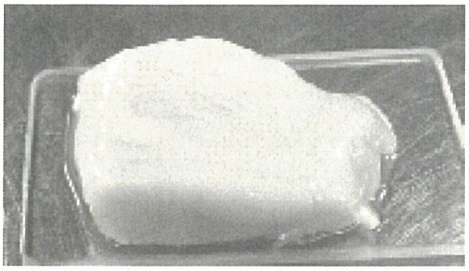
⑤複数の電池を一緒に保管する時は、それぞれの電池の端子部分をビニールテープ等で絶縁する（特にボタン電池は、ほぼ全面が金属なので重ねると危険）。

家庭内のどの製品にボタン電池が使用されているのかチェックし、電池蓋が外れやすくなっていないか確認しましょう。

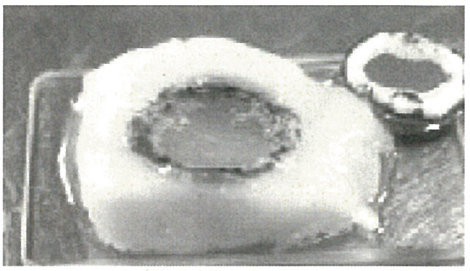
また、ボタン電池は絶対に子どもの手の届かない場所に保管しましょう。

鶏肉を使用した化学やけど再現（注）

コイン型リチウム電池

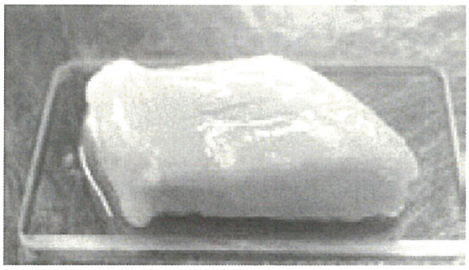


テスト前

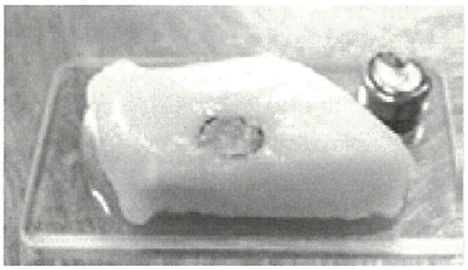


20分経過後

アルカリボタン電池



テスト前



20分経過後

（注）生理食塩水に24時間漬けた鶏の胸肉の上に、ボタン電池のマイナス極を下にして置き、常温（25℃）で20分経過後電池を除去し肉の損傷を確認した。

（出典　独立行政法人国民生活センター）